

2014年度事業報告

1. 会員動静 (2015年2月28日現在)

	新入会員	退会	資格喪失	逝去	現在数
名誉会員	2			1	33
正会員	120	86	28	6	2,907
(うち学生会費納入者)	(93)	(19)	(16)	(0)	(439)
賛助会員	0	0	0	0	11
計	116	86	28	7	2,951

2. 逝去会員

名誉会員
正会員

谷岡武雄	2014年6月14日
斎藤功	2014年3月27日
長澤秀弥	2014年3月29日
原田榮	2014年3月31日
小畑温治	2014年6月12日
山野明男	2014年11月12日
阿部史郎	2014年12月19日

3. 出版刊行物

地理学評論	6冊 (87巻3号～88巻2号) 506ページ
Geographical Review of Japan Series B	1冊 (87巻1号・電子ジャーナル) 73ページ
E-journal GEO	2冊 (9巻1号～2号・電子ジャーナル) 393ページ
学術大会発表要旨集	2冊 (86号～87号) 560ページ

4. 集 会

集 会 名	開催年月日	参 加 者
(1)秋季学術大会(富山大学)	2014年9月20日～9月22日	463名
一般(口頭)発表(94)、ポスター発表(45)、シンポジウム(9件・59)	9月20日～9月21日	
第26回地理教育公開講座	9月21日	
研究グループ集会(16件)	9月21日	
懇親会(生協食堂)	9月20日	225名
巡検2件	9月22日	
(2)春季学術大会(日本大学)	2015年3月28日～3月30日	
一般(口頭)発表(179)、ポスター発表(85)、シンポジウム(10件・66)	3月28日～3月29日	
第27回地理教育公開講座	3月28日	
研究グループ集会(20件)	3月29日	
懇親会(百周年記念館アリーナ)	3月28日	
巡検2件	3月30日	

5. 総会等

(1)定時総会	2014年6月21日	出席者26名	委任状78名	合計104名
(2)臨時総会	2015年3月27日			
(3)代議員会	2014年9月20日(第1回) 2015年3月27日(第2回)	出席者50名	委任状55名	合計105名
(4)理事会	5回・常任理事会	12回		

6. 専門委員会報告

(1) 総務専門委員会

公益社団法人としての学会の通常の運営を円滑に進めるために、記録の整理保管、会員関連事務（総会・代議員会関連、理事会関連、会員の入退会など）および対外的事務（後援・協賛依頼、転載許可、その他依頼に対する対応など）、事業計画案の作成、学会事務局の環境整備に関する業務などを行った。

また、日本地理学会賞、出版助成、小林浩二研究助成、斎藤 功研究助成、若手研究者国際会議派遣助成に関する業務などを行った。

(2) 財務専門委員会

1) 会費の徴収および予算執行に関わる通常会務を行った。

2) 2014 年度決算書（概算）案、および 2015 年度の収支予算案を作成した。

(3) 地理学評論編集専門委員会

地理学評論第 87 巻第 3 号～第 88 巻第 2 号を編集、発行した。掲載された論文数は、論説 12 編、短報 5 編である。掲載論文数は、ほぼ昨年度並であった。このうち 3 編が自然系統、14 編が人文系統であり、自然系統の掲載論文の割合は昨年上昇したものの、今年度は一昨年並みに再び低下した。このほかに会長講演 1 編、資料 1 編、書評 26 編、紙碑 2 編、学会記事等を掲載した。本年度の委員会において受理された論文数は 17 編であり、昨年度より 2 編減少した。そのうち自然系統の割合は約 35% であり、昨年度とほぼ同等の水準であった。新規投稿数は昨年度を若干上回って 44 本であったなかで、自然系統の論文の割合は昨年と同じ 23% にとどまった。本年度の掲載論文・受理論文および新規投稿論文において、自然系統の数は依然として少なく、人文系統の論文が多くを占める傾向が続いている。

新規投稿数と受理・掲載論文数を増やすためには審議の迅速化をはかる必要があることから、2014 年 4 月よりオンラインによる審査システムが導入された。論文の直接の審査を行う編集担当委員と、最終的な議決を行う編集幹事によって随時審議を進めるシステムが稼働しており、審議の迅速化とともに受理論文の増産が望まれている。

(4) Geographical Review of Japan Series B 編集専門委員会

Geographical Review of Japan Series B（地理学評論英文誌）は、電子ジャーナルとして 2014 年 3 月に Vol. 86, No. 2 を発行し、IGU 京都会議特集号 Part II の記事 3 編（いずれも総説）、および論説 3 編、短報 1 編を掲載した。2014 年 10 月に発行した Vol. 87, No. 1 には、第 8 回日中韓地理学会特集号の記事 5 編（前書き 1 編、論説 2 編、短報 1 編、報告 1 編）、および論説 1 編、短報 1 編を掲載した。

(5) E-journal GEO 編集専門委員会

オンライン学術誌 E-journal GEO では、第 7 巻 2 号から受理後の原稿の組版、画像処理、J-STAGE 搭載に関する作業を外部の業者に委託するとともに、2012 年 11 月に投稿規定・執筆要領の改訂を行った。また年 2 回のアップロードではなく、受理された原稿については、順次公表していくことにしており、本年度もこうした方針を踏襲しつつ編集業務に当たった。さらに新しいカテゴリーとして「若手研究者国際会議派遣事業報告書」を設け、同助成対象者による報告書を掲載した。

今期の編集専門委員会が編集・発行した第 9 巻は 7 回のアップロードがなされ、解説記事 8 編、調査報告 13 編、提言 2 編、シンポジウム記事 4 編を掲載した。さらに、2015 年 3 月には調査報告 1 編、提言 1 編、シンポジウム記事 8 編、若手研究者国際会議派遣事業報告書 3 編がアップロードされる予定である。9 巻では、2 つの特集（「日本のジオパークの現状と課題」「産業立地政策の経済地理学」）が生まれ、投稿数、掲載数ともに増加した。本誌は「第 3 学会誌」として、広く会員からの投稿を受け付け、比較的短い期間で査読を行い、投稿された研究成果を公開することを目的としている。一方で受理から掲載までに時間を要し、逐次アップロードのメリットを活かすことができないケースもあった。今後は編集体制を強化するとともに、社会的な認知度のさらなる向上を図っていく必要がある。

(6) 集会専門委員会

2014 年秋季学術大会（富山大学、一般発表 94、ポスター発表 45、シンポジウム 59、巡検 2）ならびに 2015 年春季学術大会（日本大学、一般発表 179、ポスター発表 85、シンポジウム 66、巡検 2）のプログラム編成および要旨集編集の業務を行った。

(7) 広報専門委員会

学会ホームページの更新を月数回のペースで随時行った。また、ツイッターとフェイスブックによる情報発信を継続的に行った。ツイッターでは学会からの情報提供と、他者が発信した地理学に関する記事の転送を行っているが、約 6000 人の人達（フォロワー）に閲覧されており、大きな反響を得ている。フェイスブックはツイッターの情報の一部を転送するメディアとして機能している。

地理学の長期的な発展のために、高校生が日本地理学会の活動に参加する新たな機会として、2014 年の春季学術大会・秋季学術大会で高校生によるポスターセッションを実施した。ホームページ、ツイッター、メーリングリスト等で呼びかけを行い、春季は 16 件、秋季は 3 件の発表が行われた。本セッションは今後の大会でも続けて行う予定である。

地理情報システムに関する商業誌 GIS NEXT に、日本地理学会のページを確保していただき、会員による研究や GIS の動向に関する記事を寄稿した。

(8) 交流専門委員会

- 1) 国内外の関係諸団体および個人からの後援・協賛などの依頼・問合せに対応した。
- 2) 2014 年 8 月開催の IGU ポーランド・クラコフ国際地理学会議の展示ブースに協力した。当該地域において作成した学会紹介パンフレット、ポスターを展示し、学会研究グループ紹介を配布するとともに、日本の地理学研究者との橋渡しをした。2015 年 8 月開催の IGU ロシア・モスクワ国際地理学会議のセッション提案に協力した。
- 3) 日本学術会議および加盟している連合組織（地理学連携機構・地理関連学会連合・日本地球惑星科学連合・自然史学会連合など）との連絡・交渉を行った。2015 年以降、地理学連携機構の事務局の機能をもつための準備を行った。
- 4) 日本地球惑星科学連合の地球人間圏科学分野でのサイエンス・ボード、環境・災害対応委員会などにおける活動に取り組んだ。
- 5) 日本地球惑星科学連合の 2015 年大会に参加する準備作業を行い、「人間環境と災害リスク」を一般セッションの提案母体となって関連学会と共催して提案したほか、GLP との関係を踏まえ「地球環境変化の人間の側面研究計画 IHDP（国際セッション）」、Future Earth 関係のユニオンセッションを関連学会等と共催して提案した。
- 6) 2014 年 7 月 30 日（火）～8 月 4 日（日）に韓国・プサン市開催の第 9 回韓中日地理学会議を共催した。
- 7) 交流専門委員会の HP を立ち上げ、掲示板には国際会議関係、日本学術会議関係他の会議アナウンスを適時掲載するようにした。

(9) 企画専門委員会

- 1) 昨年度に引き続き本年度も 4 回の委員会を開催した。
- 2) 当学会は、「G 空間 EXPO2014」（2014 年 11 月 13 日（木））に参加し、企画専門委員会は「G 空間のナカミを科学する一仏に魂を入れる地理学」のシンポジウムの企画を担当し、準備に取り組んだ。シンポジウムでは、パネルディスカッションも実施し、活発な討議がなされ、盛況だった。
- 3) 「英文叢書出版事業」に関し、応募の促進に努めた。

(10) 地理教育専門委員会

地理教育専門委員会は、ほぼ毎月 1 回定例で開催している。本年度の活動は以下の通りである。

- 1) 学術会議の提言した、高等学校地理必修化に関するシンポジウムや関係者への情報提供を行った。
- 2) 本委員会が企画、編集した英文叢書 *Geography education in Japan* (AJG Library 3) が刊行された。
- 3) 地理オリンピックを支援した。8 月にポーランドで行われた国際地理オリンピックでは銀メダルを獲得した。1 月に行われた科学地理オリンピック兼国際地理オリンピック選抜試験では、1500 人以上の申し込みがあり、そのうち 140 名ほどが 2 月に実施された第二次試験に進んだ。申込者は昨年比 400 名近く増加した。
- 4) 小学校から高等学校の教員を対象とした教員研修を茨城県大子町、埼玉県で実施した。
- 5) 大学入試に関して、センター試験の分析をするとともに、地理を受験科目として検討してもらうよう私立大学に陳情にいった。
- 6) 一般向けの地理教育公開講座（春季学術大会、秋季学術大会）を支援した。また、高校生によるポスターセッションに協力をした。

(11) 資格専門委員会

2014 年度中に資格専門委員会は 11 回、管轄する地域調査士認定委員会は 5 回、GIS 学術士資格委員会は 3 回開催した。

地域調査士講習会は、2014年4月（法政大学市ヶ谷キャンパス）、6月（日本地図センタービル（専門地域調査士講習））、10月（専修大学神田キャンパス）、11月（京都教育大学）の計4回開催した。受講者数は、地域調査士講習会227名、専門地域調査士講習2名であった。2014年度は2月21日現在、地域調査士31名、専門地域調査士6名が認定された。学部科目については19大学・21学科（コース）、大学院科目については5大学院の開設科目が認定されている。なお、制度の発足から5年を経過したことから認定科目申請に関わるキーワード見直し修正案を作成した。さらに、2014年度から地域調査士認定に「申請前部分審査」制度を導入し、学部4年生が在学中に地域調査士の認定を受けられるようにした。2月21日現在、年度内の認定を目指す者52名が適合審査を請求した。新制度導入に伴い、地域調査士審査要領通則の修正と地域調査士認定委員会運営要領の改正を行った。また、地域調査士通信を2号（2014年10月、2015年3月）発行した。

2月21日現在、GIS学術士実績証明団体数は29、GIS専門学術士実績証明団体は14である。また、2014年度にGIS学術士と認定された者は18名、GIS専門学術士と認定された者2名、GIS学術士（見込み）認定者は35名であった。

7. 各種委員会報告

(1) 名誉会員候補者推薦委員会

委員長：菅野峰明

委員：有蘭正一郎、三上岳彦、海津正倫、溝口常俊

本委員会は日本地理学会の規約に則り、委員間で慎重に検討・審議した結果、対象となる全会員の中から、下記2会員を付記した理由により、名誉会員候補者として推薦することを決定致しました。

名誉会員候補者：石原 潤会員

推薦理由：石原 潤会員は、長年にわたり名古屋大学、京都大学で人文地理学の教育と研究に従事したのち、2003年に奈良大学に移り、2008年から同大学学長を2014年まで務めた。2003年には名古屋大学と京都大学から、2014年には奈良大学から名誉教授の称号を授与された。この間に、著書19冊、訳書3冊を公刊している。論文としては地理学評論、人文地理をはじめ、主要な学会誌に多くの論文を発表し、地理学関係辞典での執筆、科学研究費による研究成果報告の出版も多数おこなっている。

同会員は、人文地理学の研究、なかでも農村研究、定期市研究に力を注ぎ、この分野の第一人者として、緻密な理論に基づく多くの論文を発表し、学界をリードした。1960年代の集落と村落共同体を考察した研究は、後進の村落社会研究の模範となった。その後、70年代にインドのセンサス、中国の地方誌を統計的に分析し、定期市の配置に関する理論的な考察を推し進め、80年代にインド、バングラデシュで7年間にわたり数十箇所の定期市を訪問し、現地調査を徹底した。これらの成果は名古屋大学での学位論文となり、『定期市の研究—機能と構造』（名古屋大学出版会、1987）にまとめられた。学位授与後は主たるフィールドを中国に移し、今日に至るまで定期市と都市・農村の変貌過程を明らかにする現地調査を継続し、『内陸中国の変貌』（ナカニシヤ出版、2003）などの優れた書物を刊行してきた。

同会員は、日本地理学会においては、会員歴50年、その間に1990年から評議員を務め、2006年から2年間日本地理学会会長の要職に就いた。99年からは人文地理学会会長を務め、1980年と2013年に日本で開催された国際地理学会では専門委員として活躍した。また2003年からは日本学術会議会員として、地理学界の発展に多大な貢献をした。

このように、永年にわたり地理学の教育・研究を通して後進の指導と人材の育成、学術の向上に尽力した同会員の功績は誠に顕著である。

以上の功績により、石原 潤会員を本会の名誉会員候補者として推薦する。

名誉会員候補者：前島 郁雄会員

推薦理由：前島郁雄会員は、長年にわたり早稲田大学、東京都立大学（現：首都大学東京）、日本大学に勤務し、自然地理学、とくに気候学を中心とした研究と教育に従事され、1991年には東京都立大学から名誉教授の称号を授与された。この間に、地理学評論掲載論文1編、書評8編をはじめ、地理学関連学術書に多数の論文・報告を発表するとともに、『気候学・気象学辞典』（二宮書店、1985年）など地理学関連辞典の編集・分担執筆も多数行っている。

同会員は、自然地理学の一分野である気候学を、それまでの平均値に基づく静的な気候学から、毎日・毎年繰り返される動的な気候学へと発展させることに尽力された。日本の自然季節に関する一連の研究では、1年間の季節変化を毎日の気温や水蒸気圧、日照時間、雲量などの連続的な年変化として表現することで現れる急変日（特異日、シンギュラリティ）に着目して季節区分を試みた成果を、学位論文“Natural Seasons and Weather Singularities in Japan”にまとめられた。気候を動的に理解するためには、大気の大循環に伴う高低気圧や前線の位置と移動経路などを、地上の天候・気候と関連づけて考察することが重要であるが、その先鞭として総観気候学的手法を研究・教育に活用された功績は大きい。また気候変動の

研究にも積極的に取り組まれ、特に江戸時代の日記天気記録に基づく小氷期の気候復元研究は、日本の歴史気候学研究の先駆けとなった。

同会員は、文部省学術審議会専門委員、同大学設置審議会専門委員、同理学視学委員など、地理学分野の大学教育行政に長年携わるとともに、日本地理学会においては、会員歴 64 年、その間に庶務委員、会計委員、集会委員、編集委員、名誉会員候補者推薦委員会委員長などを歴任し、学会の発展に尽力した。

以上の功績により、前島郁雄会員を本会の名誉会員候補者として推薦する。

(2) 日本地理学会賞受賞候補者選考委員会

委員長：高木彰彦

副委員長：山縣耕太郎（小委員会A）、尾藤章雄（小委員会B）、高木彰彦（小委員会C）

委員：小委員会A（優秀論文部門、若手奨励部門、論文発信部門）：山縣耕太郎、池 俊介、岩間信之、川久保篤志、友澤和夫、松山 洋、山中 勤

小委員会B（優秀著作部門、著作発信部門）：尾藤章雄、小野有五、鈴木毅彦、高柳長直、中村周作、藤田裕嗣、山川修治

小委員会C（地理教育部門、学術貢献部門、社会貢献部門）：高木彰彦、近藤昭彦、境田清隆、鈴木康弘、高橋春成、山崎孝史、山下宗利

選考委員会の答申を受け、理事会決定した受賞者名・選考理由を下記に掲載する。

優秀論文部門受賞候補者：稲垣 稜会員

「大都市圏郊外における中心都市への通勤者数減少の要因に関する考察—1990年代後半以降の奈良県生駒市を中心に—」『地理学評論』第87巻第1号

本論文は、中心都市への通勤率低下という今日的な現象の実態とその要因について、国勢調査および大規模なアンケート調査をもとに精緻に分析している。複数の世代や居住形態の住民を対象とする独自のアンケート調査を基にした多面的な分析から導き出された結論は説得力が高い。郊外第一世代と第二世代の通勤行動、若年層における非正規雇用化、女性の通勤行動の変化など、通勤者の減少を興味深い視点から分析している点も特筆に値する。新しく得られた知見は、今後の検討課題として示唆に富み、大都市圏の通勤流動に関する研究として高く評価できる。

若手奨励部門受賞候補者：網島 聖会員

「戦間期の同業者町における取引関係と「調整」の変化—1914～1940年の大阪・道修町の医薬品産業を事例に—」『地理学評論』第87巻第1号

本論文は、大阪市道修町を事例として、戦間期における経済システム変化の中で、薬品業界の産業集積がどのように変貌を遂げたかについて、同業者の「調整」のあり方に着目して丁寧に検証している。その結果、第一次大戦前に見られた同業者間での水平的な「調整」の衰退と、同業者町の構造の変質を明快に説明することに成功している。分析において「地域的レギュレーション」概念を導入して「調整」の実態に迫っている点に高いオリジナリティが認められる。研究上の手続きにおいて、数多くの史料・統計を丹念に活用して実証を試みている点も特筆される。このように産業集積の史的分析に新しい視座を与えた研究として、本論文の学術的価値は高い。

論文発信部門受賞候補者：岩田修二会員

「高校地理教科書の「造山帯」を改訂するための提案」E-journal GEO、第8巻第1号

本稿は、高校地理教科書「世界の大地形」の記述に関する問題点を地形学の専門家の立場から指摘している。1970年代以降、地向斜造山運動論からプレート論への転換が進む中で、造山帯と変動帯の不正確な説明や、地形と地質の概念の混同、山岳地域の地形に対する認識の低さなどの問題が生じてきたことが論理的に説明されている。このような問題が生じてきた背景には、教科書に関わる業界内の悪循環が存在し、それを断ち切るためには、まず大学教員の努力が必要という主張も傾聴に値する。さらに本稿では、問題点の指摘に止まらず教科書記述の改善策と具体的な高校地理教科書「世界の大地形」の改訂案を提示しており、きわめて意義深い。本稿は、専門研究者が地理教育に積極的にコミットすることの重要性を示す事例として高く評価される。

優秀著作部門受賞候補者：水野一晴会員

水野一晴会員による著書『神秘の大地、アルナチャル—アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』（昭和堂、2012

年) は、インド最北部に位置し、中国のチベット自治区に国境を接しているが故に、係争地域として外国人の立ち入りが難しいヒマラヤの山岳地域にあって、独自の社会や文化を築いてきた民族であるモンパ族に焦点を当てて書かれた地誌書である。彼らが現在の地に根付くまでの移住の歴史、以前に住んでいたチベットから引き継いで大きな影響力を持つチベット仏教やボン教、アミニズムなどの信仰に加えて、森林管理、ヤクの放牧を中心とする牧畜民社会、標高帯ごとに少しずつ異なる農耕民社会という代表的な生業形態を順に整理して紹介している。

現地での綿密なフィールドワーク・聞き取り調査に基づく内容を、一般向けに平易な文体で紹介しており、珍しい写真と説明文に助けられて、興味深い「神秘の大地」を実感することができる。皆に知られていない未踏の地を精力的に紹介する、地理学者の原点に返ったとも言うべきもので、専門化が進む地理学において特筆すべき業績といえる。

著作発信部門受賞候補者：上村直己氏

上村直己氏による訳書『リヒトホーフエン日本滞在記—ドイツ人地理学者の見た幕末明治』(九州大学出版会、2013年)は、地理学者として有名なドイツのリヒトホーフエン男爵が、幕末1860年および明治維新直後の1870年に日本を旅行した際の日記の翻訳書である。ヨーロッパの地質学者・地理学者であったリヒトホーフエンの目に映った江戸(東京)から松本、名古屋を経て大阪、さらに瀬戸内海を船で渡り九州に至る詳細な記述は、外国人の目で解釈した日本の自然美、人々の生活様式に及び、当時の日本を知る上でその資料的価値は大きい。

原著はドイツ語で書かれ、長編であるために翻訳が難しかったが、日本独学史・日独文化交流史を専門とし、一時的ながら熊本大学地理学講座に在籍していたという訳者が15年をかけてこの書を完成させた。歴史家の書いた幕末明治の記述はよく見るが、この書に特徴的なのは日本の風景の細かな記述であり、当時のヨーロッパにおける地理学の高さを物語るものとしても貴重である。大著の翻訳は地理学史に残る大きな業績で著作発信部門としての表彰にふさわしい。

著作発信部門受賞候補者：村田陽平会員

村田陽平会員による著書『受動喫煙の環境学—健康とタバコ社会のゆくえ』(世界思想社、2012年)では、受動喫煙の問題について、日常の社会環境、労働環境に見られる健康被害を指摘した上で、これが煙を吐く強者に対して吸わざるを得ない立場に置かれた弱者、すなわち社会空間における不平等ないしは差別の問題であると位置づける。そしてこれを、小さいながらも人間を取り巻く社会経済的背景に連なる環境問題の一つであると捉え、商品広告に謳う「男らしさ」というジェンダーへの訴求、喫煙マナーや分煙という戦略で世論に抵抗しようとするたばこ産業の思惑などを挙げ、我が国の受動喫煙対策が遅れている理由に結びつける興味深い論考を展開している。

我が国で受動喫煙のない社会環境を実現するためには、国政による統一的な法的整備が必要だとする、終章の著者の訴えかけは、綿密な分析のあとだけに強い説得力を感じさせる。地理学が、環境社会学の分野にも目を向けていることを世間に知らしめるという、戦略的な意義からも、著作発信部門としての表彰にふさわしい。

地理教育部門受賞候補者：小野寺 徹会員

小野寺 徹会員は、北海道の高校教員として長く地理教育の普及、発展に努めてきた。この間、北海道旭川市で毎年開催されている「私たちの身のまわりの環境地図作品展」創設に尽力し、同展の実行委員長および環境地図教育研究会副会長を長年にわたって務めるとともに、「環境地図教育フェア」の基盤形成と発展に大いに貢献した。

また、早くからGISを活用した授業に取り組むとともに、GISを活用した行政との協働による豪雪の危険回避システムを構築している。さらに、GISを用いた主題図は国内マップギャラリーで上位入賞し、海外で開かれたマップギャラリーにも参加するなど、GIS教育の普及に貢献している。

以上の理由により、小野寺 徹会員を日本地理学会賞(地理教育部門)にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

社会貢献部門受賞候補者：柳原 望氏

柳原 望氏は漫画家で、コミック誌に多数のコミック(漫画)を掲載している。とりわけ、『高杉さん家のおべんとう』は月刊誌に連載された後、単行本として、現在、9巻まで刊行され、100万部以上を売り上げている。同書では、主人公が地理学の若手研究者として設定されているため、巡検や学会の様子など、地理学という学問の方法や特徴が作品中の随所に描かれており、高校生を中心とした読者に地理学という学問の特徴や面白さを大いに普及・啓発した。

さらに、柳原氏は、これまでに地理学者との連名で何度か学会発表を行っている。2013年に開催されたIGU京都会議でも、ポスター発表で挿絵を担当するとともに、研究グループのブースを設営・運営するなど、学会活動にも寄与している。

以上のことから、柳原 望氏を日本地理学会賞（社会貢献部門）にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

(3) 災害対応委員会

委員長：熊木洋太

委員：青木賢人、青木朋子、宇根 寛(幹事)、海津正倫、岡谷隆基、小口千明、久保純子、坂上寛之、佐藤 浩、須貝俊彦、杉戸信彦、鈴木毅彦、鈴木康弘、田中 靖、西村智博、八反地 剛、堀 和明、村山良之、吉田英嗣(幹事)

災害対応担当理事：春山成子

2014年度、本委員会は、4回の委員会と秋季学術大会時、春季学術大会時（予定）に拡大委員会を開催し、以下の活動を行った。

- 1) 災害対応委員会のホームページを通じて、災害に関する情報を発信している。8月広島市における豪雨災害については、11月に9名の委員等により調査団を組織し、現地調査を実施した。
- 2) 地域拠点委員の充実を図った。
- 3) IGU クラック地域会議（8月）および防災・減災に関する国際研究のための東京会議（1月）において、日本の地理学における災害研究や日本地理学会のこれまでの災害対応を説明するポスターを展示した。
- 4) 国連防災世界会議準備委員会が提示したポスト兵庫行動枠組のゼロドラフトに対する ICSU の修正意見についての意見募集に応じ、防災における地理学の重要性を明示するよう意見を提出した（11月）。
- 5) 日本地球惑星科学連合2014年大会（4～5月）において、日本地理学会が中心となって提案したセッション「人間環境と災害リスク」の企画・運営への協力を行った。2015年の同大会についても同様に対応中。また、ユニオンセッション「連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？」において、熊木災害対応委員長が本学会を代表して講演を行った。2015年の同大会でも同名のセッションが開催される予定であり、対応中。なお、同連合の環境・災害対応委員会の本学会からの委員は、須貝理事から熊木災害対応委員長に交代した（6月）。
- 6) 2014年3月の春季学術大会（国士舘大学）で実施したシンポジウム「レジリエントな国土・地域社会の構築に向けた地理学的課題」の記事をE-journal GEO 9巻1号に掲載した。
- 7) 2015年3月の春季学術大会（日本大学）において、公開シンポジウム「はたらく地理学—防災分野における地理学出身者の活躍と課題—」を実施する。

(4) 地理教育公開講座委員会

委員長：田部俊充

委員：池下 誠、小口久智、佐藤崇徳、永田忠道、山中正則、西岡尚也、日原高志、深瀬浩三、松浦直裕、山内洋美、吉田 剛

地理教育公開講座は、広く一般社会に地理学・地理教育への普及・啓発を目的に、地理教育専門委員会傘下の地理教育公開講座委員会が主催して、春・秋季学術大会時に開催している。今年度は世界地誌学習に焦点をあてて開催された。

2014年春季学術大会（国士舘大学）では、第25回講座として「アメリカ世界地誌Q&A」をテーマに、矢ヶ崎典隆（日本大）、高柳長直（東京農業大）、深瀬浩三（鹿児島大）の報告後、コメンテーターとして、寺本 潔（玉川大）、山内洋美（宮城県塩釜高）が登壇し、熱心な意見交換が行われた（参加約60名）。

2014年秋季学術大会（富山大学）では、第26回講座として「ヨーロッパ世界地誌Q&A」をテーマに、加賀美雅弘（東京学芸大）、松浦直裕（金沢西高）、高木 優（神戸大学附属中等教育学校）の報告後、コメンテーターとして、山中正則（越谷市立大沢北小）、澤田和博（富山中部高）が登壇し、地誌学習の方向性について熱心な意見交換が行われ、井田仁康（筑波大）が総括した（参加約60名）。

公開講座の成果を蓄積するために、日本地理教育学会学会誌新地理に発表内容を掲載した。また、参加者の拡大をめざし教科書会社HPへの案内掲載を実施した。今後、地理学者と小中高の現場教員の連携をはかり、参加数をどう増やすかが課題である。社会全体へ地理学・地理教育の「すそ野」を拡大するためにも、公開講座を地道に継続する意義は大きいと考える。

(5) GIS 学術士資格委員会

委員長：村山祐司

委員：碓井照子、宇根 寛、小口 高、鈴木厚志

本年度は3回の委員会を開催した。第1回は2014年6月21日（土）に開催し、第2回は、2014年10月4日（土）10

時～12 時に開催し、GIS 学術士認定、GIS 学術士（見込み）から GIS 学術士への変更認定、GIS 専門学術士認定、GIS 学術士（見込み）認定証発行、GIS 学術士実績証明団体認定科目審査、GIS 専門学術士実績証明団体認定科目審査、2015 年度以降の GIS 学術士制度について審議を行った。第 3 回は、2015 年 2 月 21 日（土）10 時～12 時に開催し、GIS 学術士認定、GIS 学術士（見込み）から GIS 学術士への変更認定、GIS 専門学術士認定、GIS 学術士（見込み）認定証発行（9 月 22 日以降）、GIS 学術士実績証明団体認定科目審査、GIS 専門学術士実績証明団体認定科目審査、および 2015 年度の委員会開催日程について審議を行った。

(6) ジオパーク対応委員会

委員長：菊地俊夫

委員：有馬貴之、岩田修二、金田章裕、小泉武栄、河本大地、中井達郎、新名阿津子、宮原育子、目代邦康、
柚洞一央、渡辺悌二

ジオパークに関する学術的な議論を深め、各地のジオパークの活動を支援し、活性化するよう活動を進めている。2013 年度をもって松本 淳（首都大）が委員を退任し、新たに宮原育子（宮城大）が委員となった。学術大会時に委員会を 2 回開催し、また、以下の取組みを実施した。

- 1) JpGU2014 において、日本地質学会等と「ジオパーク」セッションを共催した。
- 2) 秋季学術大会において、公開シンポジウム「北陸におけるジオパークの現状と課題」をオーガナイズした。
- 3) 「大地の遺産百選」選定作業を昨年度から継続して行った。
- 4) 過去のシンポジウムにおける発表を中心にして、E-journal GEO で特集「日本のジオパークの現状と課題」を発行した。
- 5) 2015 年春季学術大会におけるシンポジウム「ジオパークにおける教育力」の準備をすすめた。
- 6) 日本ジオパーク委員会の改選があり、菊地委員、宮原委員を選出した。

(7) 地域調査士認定委員会

委員長：田林 明

委員：金田章裕、小泉武栄、戸所 隆、星埜由尚

4 回の委員会、主として以下のことを行った。(1) 今年度申請のあった者に対して厳正な資格認定審査を行い、地域調査士 31 名と専門地域調査士 6 名の認定を理事長に具申した（学会 HP に公表）。(2) 大学および大学院から申請のあった科目について審査を行った。(3) 地域調査士認定科目の申請に関わるキーワードの修正案を確認した。(4) 地域調査士申請前部分審査を新たに実施することにし、この制度に基づく 52 名の請求者の書類を確認した。(5) 地域調査士制度の定着と発展の方策について意見を交換した。

(8) 出版助成委員会

委員長：佐藤典人

委員：篠田雅人、土屋 純、三木理史、村山朝子、由井義通、横山 智

日本地理学会では「地理学研究の振興と社会への貢献」を目的として当出版助成制度を導入してから、本年度でちょうど 5 年目を迎える。この出版助成制度の対象となる図書は、地理学に関する学術図書として、本年度は 2014 年 6 月 1 日～30 日を申請期間として公募を実施した。その結果、3 点の応募があった。出版助成委員会は、委員 7 名（委員長を含む）で組織され、全委員が申請された 3 点の図書に対して審査に臨んだ。まず各委員に対象図書に対してそれぞれ 0～10 点の範囲で評価点をつけるとともに、その評価に至った判断理由を添えて、2014 年 8 月上旬までに提出して頂いた。委員長はそれを集計した上で、集計結果の総合点と推薦順位、および評価コメントを添付して全委員に再度、諮った。その際、基本的には評価点の累計が 8 割以上と高く、かつ拮抗していた上位 2 点を推薦する原案を各委員に伝達した。それに対して指定期日の 8 月 18 日まで特段の異論が無かった。

それを踏まえて、申請された 3 件のうち上位 2 点をここに推薦したい。ただし、集計結果が 3 位となった図書についても、分野を超えた学際的なプロジェクト研究であり、アジアのメガシティの都市化過程を可視化して比較考察に努めた独創性と資料的価値を評価する意見が強くあったことを付言しておきたい。

出版助成委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：久保倫子会員

久保倫子著『東京大都市圏におけるハウジング研究—都心居住と郊外住宅地の衰退—』（古今書院）

本書は、著者が大学院在籍時から一貫して取り組んできたハウジング研究の集大成と位置づけた単著であり、その斬新

な内容や問題着眼的確性、ならびにその独創性において高く評価できる。また、大都市内部と周辺の郊外地域を対比しつつ、その地域変貌への分析や居住に関する多彩な枠組みで実証的に追究している内容は、都市地理学の研究に寄与するのみならず、周辺諸科学へのアピール、さらには社会的なインパクトも期待できる。これらの点を評価して本助成の趣旨に十分適うものと判断できる。

交付認定者：和田 崇会員

荒井良雄・箸本健二・和田 崇編著『インターネットと地域』（ナカニシヤ出版）

本書は、日本地理学会に組織された研究グループの成果刊行物である。今世紀初頭から日本の諸地域に普及・定着したインターネットとそれを前提に流通する地域コンテンツに焦点を照射し、インターネットが地域社会に及ぼす影響を、今日の情報化社会の視点から捉えた研究の意義を高く評価したい。また従来、日本の地理学の世界において、ともすれば十分に扱われてこなかった分野の書籍である点や学界の外向けに発信する出版の価値・効果において、本助成の趣旨に適っている。

(9)英文叢書編集委員会

委員長：矢ヶ崎典隆

委員：荒井良雄、石川義孝、小口 高、須貝俊彦、春山成子、松本 淳、村山祐司（幹事）

日本地理学会が2011年6月にシュプリンガー・ジャパン（株）との間に取り交わした英文叢書出版覚書に基づいて、本委員会は英文叢書 *International Perspectives in Geography: AJG Library* の刊行事業を行った。会員からの投稿を受けて原稿を審査するとともに、シュプリンガー・ジャパンの担当者とはさまざまな打ち合わせを行った。今年度は、K. Yamamoto. *The Agglomeration of the Animation Industry in East Asia*, Y. Ida et al. eds. *Geography Education in Japan*, S. Haruyama and T. Shiraiwa eds. *Environmental Change and the Social Response in the Amur River Basin*, K. Mizuno and L. Tenpa. *Himalayan Nature and Tibetan Buddhist Culture in Arunachal Pradesh, India* の4冊を刊行した。日本における地理学研究の振興と国際社会への発信を目的とした本叢書は本学会の重要な出版事業の一つであり、本叢書を発展させるために広報活動を継続することの重要性を確認した。

(10)「小林浩二研究助成」審査委員会

委員長：加賀美雅弘

委員：荒又美陽、漆原和子、竹中克行、村山朝子

審査委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：飯塚 遼会員

「ベルギー・東フランドレン州における芸術家村の盛衰とジェントリフィケーション」

交付認定者は、すでにヨーロッパでの調査の実績を積んでおり、申請された助成金の使途について一定の妥当性があると判断される。ベルギーの都市近郊農村で生じている変化を検討することによって、ヨーロッパ地域研究について新たな成果が期待できることから、助成にふさわしい申請であると評価する。

(11)「斎藤 功研究助成」審査委員会

委員長：矢ヶ崎典孝

委員：石井久生、河原典史、高橋重雄、丸山浩明

審査委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：横山貴史会員

「チリ共和国における地域拠点型漁業資源管理の成立条件：生計アプローチによる分析」

日本の地理学界では、南アメリカのスペイン語圏に関する地理学的研究に携わる研究者はきわめて限られている。しかも、日本との関係が深いチリの漁業や小規模漁業者についての関心は低い。申請者はチリの養殖業についてすでに調査の実績を有し、現地における研究ネットワークを構築済みである。また、大学院在籍中から精力的に研究と研究成果の公表に取り組んでいる。以上から、本研究計画の遂行可能性は高いと判断される。申請者がチリの漁業事情を研究することにより、チリと日本との交流に寄与する可能性も期待できる。

(12) 「若手研究者国際会議派遣助成」 審査委員会

委員長：石川義孝

委員：春山成子、村山祐司

提出された申請書および申立書に基づき慎重に審査した結果、この助成制度の趣旨に合致し、発表内容が優れている3名を採択者とした。

交付認定者：磯野 巧会員、植村円香会員、久保倫子会員

8. 研究グループ報告

『地理学評論』第87巻第1号に研究グループの公募を掲載した。2014年2月8日の常任理事会で承認された2014年度の研究グループは33である。それぞれ下記のような活動を行った。

2014年度研究グループ一覧 (2014. 2. 8 常任理事会承認)

グループ名	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
近代日本の地域形成 乾燥・半乾燥地域 都市気候環境 土地利用・陸域変化 離島地域	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
環境地理教育 情報地理 流通・消費の地理学 中国地理 産業経済の地理学							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネイチャー・アンド・ソサエティ 国際経済・経営 エスニック地理学 地図・絵図資料の歴史 GIS 観光地域									○	○	○	○	○	○	○	○	○
農業・農村の地理学 都市地理学 日本における亜高山・高山域の 植生・環境変遷史 持続可能な交通システム 自然保護問題												○	○	○	○	○	○
少子高齢化と地域問題 ジェンダーと空間/場所 現代南アジア 都市社会地理 ICTを活用した地理学の 社会普及・連携												○	○	○	○	○	○
GISと社会 東日本大震災による被災地 の再建にかかわる 日本アルプスの大規模地すべり 水と人の地誌 大衆文化の地理学 気候と災害の歴史														○	○	○	○
健康地理研究 「新しい公共」の地理学																○	○

(1) 近代日本の地域形成研究グループ

代表者 天野 宏司

2014年度は次の日程で活動を行った。

[第1回集会 (研究集会・ビジネスミーティング)] 2014年3月28日 (金) 15時~17時、於 国土舘大学世田谷キャンパス(34号館A棟34A406教室)、参加者4名。今年度(2014年度)の活動計画について。

[第2回集会 (シンポジウム準備会 (打合せ研究集会)) 2014年8月12日 (月)、於 筑波大学東京キャンパス、参加者7名。

[第3回集会 (シンポジウム)] 2014年9月21日 (日)、於 富山大学五福キャンパス、参加者約40名。
「近代日本における地方拠点的地域の形成過程と人間主体の社会空間的活動」

(2) 乾燥・半乾燥地域研究グループ

代表者 鹿島 薫

新疆ウイグル自治区およびモンゴル共和国を主要調査対象地域として、活動を展開している。

2014年5月に鹿島 薫会員が、9月に高村弘毅会員が新疆大学に招聘され渡航し、講演を行った。そして2014年12月に新疆大学から2名、モンゴルから4名の研究者を九州大学に招聘し、共同でシンポジウムを開催した。2015年2月、日本・エジプト・韓国共同のシンポジウム *International Seminar on Climate Events on Quaternary* を九州大学で開催した。参加大学・機関は、九州大学、韓国忠南大学、エジプト・モノフェイア大学であり、合計10名が参加した。

(3) 都市気候環境研究グループ

代表者 榊原 保志

春季および秋季の学術大会で研究グループ例会を開催し、いずれも十数名の参加者があった。
発表者とテーマは以下の通りである。

[春季学術大会例会] 2014年3月28日 (金)、於 国土館大学世田谷キャンパス。

重田祥範 (立正大) : 「都市構造および周辺地形の違いがヒートアイランド強度に与える影響」

浜田 崇 (長野県環境保全研)・榊原保志 (信州大) : 「那覇市におけるヒートアイランド—観測とシミュレーション」

[秋季学術大会例会] 2014年9月21日 (日)、於 富山大学五福キャンパス。

中村祐輔 (立正大・院)・重田祥範 (立正大) : 「埼玉県熊谷市におけるヒートアイランド強度の日変化パターン」

森島 濟 (日本大) : 「開発と都市気候モニタリング—千葉県流山市を事例に—」

木村恭徳・高橋日出男 (首都大) : 「東京の都心から西郊に現れる冬季夜間の気温急変域と季節風吹走との関係」

(4) 土地利用・陸域変化研究グループ

代表者 木本 浩一

2014年度は、8月に開催されたIGU/Krakow 国際地理学会議のセッション *Land Use Cover and Change (C12.26)* において、研究グループのメンバーが報告を行うとともに、セッション後にはIGU/LUCCの今後のあり方についてミーティングを行った。また、9月の日本地理学会秋季学術大会では、シンポジウム「フューチャー・アースと土地利用・陸域変化研究—交点・接点・基盤—」を実施した。シンポジウム当日の午後には、グループ研究会を実施し、IGU/LUCCに関わる国際的な動向やフューチャー・アースへの貢献の可能性などについて意見交換を行った。さらに、昨年度に引き続き、日本地球惑星科学連合 (JpGU) では、本グループに関わるIHDPセッションが開催された。次年度は、引き続き、これまで築いてきた国際的なネットワークを国内に還元・共有することを本グループの主たる活動としつつ、グループ研究会を利用した若手研究者の育成にも取り組んでいきたい。

(5) 離島地域研究グループ

代表者 平岡 昭利

2014年は日本地理学会の大会に合わせて2回の研究会を開催し、計3本の発表があった。いずれの研究会も活発な討論が行われ盛会であった。

[第1回研究会] 2014年3月28日 (金)、於 国土館大学世田谷キャンパス。

麻生 将 (立命館大) : 「近代奄美大島の景観変容と特徴—名瀬を中心に—」

平岡昭利 (下関市立大) : 「今後の研究グループ活動について」

終了後、懇親会を開催した。

[第2回研究会] 2014年9月21日 (日)、於 富山大学五福キャンパス。

中條曉仁 (静岡大) : 「長崎県小値賀町における観光まちづくりの展開とその意義」

一柳亮太 (フリーライター) : 「沖縄県多良間村における住民用広報誌の作成からみた小規模離島の帰属意識」

終了後、懇親会を開催した。

(6)環境地理教育研究グループ

代表者 朴 恵淑

2014年度は、次の日程で活動を行った。

1) 研究集会

2014年3月28日(金) 15時～17時、於 国土舘大学世田谷キャンパス、参加者10名。

朴 恵淑(三重大)：「ESD in 三重 2014」

宮岡邦任(三重大)・谷口智雅(三重大)：「水環境を素材とした地誌学巡検」

2014年9月21日(日) 15時～17時、於 富山大学五福キャンパス、参加者6名。

谷口智雅(三重大)・宮岡邦任(三重大)：「三重大学におけるESDの取り組み—ESD in 三重 2014—」

2) ESD in 三重 2014 の開催

[ESD in 三重 2014—アジア・太平洋持続可能な開発のための教育(ESD)ユース世界会議—] 2014年11月7日(金)～11月12日(水)、参加者：世界の19カ国の約201名。

開催概要：日本を含むアジア・太平洋地域の小・中・高・大学生が、文化・年齢の違いを越えた交流の中で、環境保全、国際理解、生物多様性保全、文化・伝統の保存・継承等のESDプログラムを体験した。そして彼らが、これからの持続可能な社会づくりに向けて必要なことに気づき、考え、学ぶことを通じて、次世代を担う自ら(ユース)の役割を見出し、それらを『アジア・太平洋持続可能な開発のための教育(ESD)ユース宣言』としてまとめられた。

3)シンポジウムの開催

[三重大学ユネスコスクール研修会/シンポジウム2014] 2014年12月6日(土) 14時～17時、於 三重大学環境・情報科学館1階ホール、参加者約150名。

テーマ：「ESD in 三重 2014」国際会議—ESDに関するユネスコ世界会議の成果・今後の展望—。中学・高校・大学の環境教育関係者、学生、行政などの参加があった。

(7)情報地理研究グループ

代表者 原 真志・和田 崇

1) 研究会の開催

日本地理学会春季学術大会(国土舘大学)および秋季学術大会(富山大学)において、以下の通り研究報告会を開催した。

[第14回例会] 2014年3月28日(金) 13時～15時、於 国土舘大学世田谷キャンパス。

福井一喜(筑波大・院)：「新聞広告を介した情報流通の地域差—情報流通の空間性に関する一考察—」

助重雄久(富山国際大)：「離島観光におけるインターネットの活用—宮古島と屋久島の実態を中心に—」

ビジネスミーティング：『インターネットと地域』出版に向けた調整を行った。

[第15回例会] 2014年9月21日(日) 13時～15時、於 富山大学五福キャンパス。

中下翔太(広島大・院)：「中山間地域の高齢者における情報機器の利用—徳島県上勝町を事例に—」

ビジネスミーティング：『インターネットと地域』出版に向けた調整を行った。

2) IGU2014 クラクフ大会(2014年8月18～22日)への参加・報告

本研究グループの構成メンバーから、荒井良雄(東京大)、箸本健二(早稲田大)、山本健太(國學院大)、佐竹泰和(東京大)の4名が「情報地理コミッション」の報告者として参加した。

3) 『インターネットと地域』の刊行

2015年3月にナカニシヤ出版より『インターネットと地域』が刊行された。なお、本書刊行に当たり、日本地理学会より出版助成を得た。

4) ホームページの活用

ホームページを運営し、研究グループの活動紹介などに利用している。

5) メーリングリストの運用

メーリングリストを運営し、情報交換などに利用している。

(8)流通・消費の地理学研究グループ

代表者 土屋 純

[第1回研究集会] 2014年3月28日(金)、於 国土舘大学世田谷キャンパス。

兼子 純(筑波大)：「流通地理学の研究手法に関する一考察」

秋山祐樹(東京大)：「マイクロジオデータを活用した都市・地域センシング研究」

[その他] メーリングリストによる情報交換を行った。

(9)中国地理研究グループ

代表者 小野寺 淳

2014年度、富山大学で開催された秋季学術大会において、国際シンポジウム『ポスト満洲としての中国東北—フィールド調査に基づく地域像再考—』を行うことができた。大会2日目9月21日(日)午前に開かれ、40人を超える出席者を得た。まず7名が登壇して口頭発表を行い、それらに対して3名がコメントを述べ、さらにフロアーを含めて質疑応答が進められた。主な視点は、経済、農業、都市、そして文化であり、歴史を踏まえながらそれらを一つの地域として総合することによって、どのような像を結ぶことができるのかが議論となった。中国東北は清朝の封禁が解かれてのち、近代に開発が進んだ地域である。満洲期はその一つの過程に位置づけられるが、その後の社会主義的開発や構造調整、高度経済成長を経験した現在の都市化や工業化、農業開発について、満洲期の貢献を過大に評価することはできない。1億を超える人口を有するに至った中国東北は、土地や資源に恵まれたフロンティア的性格を残しており、なお潜在力を持った地域とみなすことができよう。

来たる2015年3月の日本大学で開催される春季学術大会においては、集会を開いてお二人から話題提供をしていただくことと企画している。お一人は、昨秋にお茶の水女子大学で博士号を授与された李小妹氏であり、博士論文を基に「深圳のテーマパークからみる中国都市空間の表象と実践」をお話いただく。もうお一人は、愛知大学大学院文学研究科地域社会システム専攻(地理学)の高木秀和氏であり、ICCS環境グループのプロジェクトや東亜同文書院大学記念センターの「大旅行」研究に関してお話いただく。さらに、今後のグループの活動の展望について意見交換をすることになるであろう。

(10)産業経済の地理学研究グループ

代表者 末吉 健治

産業経済の地理学研究グループは、2014年度の活動を下記のように行った。

[第14回研究集会] 2014年3月28日(日)15時~17時、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者15名。

鹿嶋 洋(熊本大):「分工場経済地域における主力工場の閉鎖と労働者の流動—鹿児島県出水市の事例—」

2014年秋季学術大会(富山大学)は、参加者が少ないことが予想されたため、研究集会の開催を見送った。

本グループが対象とする事象に関する研究内容の深化は、社会的要請も高いものであることには引き続き変わりはない。グループの活動期間もおおよそ10年に渡り、この間多様な報告があったことで、本領域の一定程度の研究の蓄積・深化がはかられてきた。よって、今後の活動方針としてはそれらを踏まえて、出版等総合化していくことを考えている。まずは手始めとして、次年度は研究グループとしてシンポジウムを開催する予定である。

(11)ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ

代表者 池口 明子

2014年は、下記の活動を行った。

[春季大会シンポジウム] 2014年3月28日(金)、於 国士舘大学世田谷キャンパス。

「生き物を飼育することと地域社会—ミツバチとヒト、魅惑のかかわりを考える—」

(趣旨説明) 柚洞一央(室戸ジオパーク推進協議会)

市川直子(玉川大):『社会』を単位に生きるミツバチ

野中健一(立教大):「人類史における養蜂への地理学的視点」

シャーロット・ペイン(立教大・院):「中部地方における地蜂飼育伝統の変転期」

上村早江子(愛知淑徳大・学)・梶原英彦(愛知商業高)・野中健一(立教大):「名古屋市内における都市養蜂を生かしたまちづくりへの高校生の貢献」

柚洞一央(室戸ジオパーク推進協議会):「近代産業としての養蜂」

(コメント) 鈴木義久(三重県中央家畜保健衛生所)、石塚武夫(養蜂家・元 JICA 短期派遣専門家(養蜂))、高橋春成(奈良大)

シンポジウムでは、養蜂の地域的多様性や農業をはじめとする産業とのかかわり、近年の伝染病の影響、および個人養蜂家の増加の実態やその現代的課題等について活発な議論がなされた。

[秋季大会研究グループ集会] 2014年9月21日(日)、於 富山大学五福キャンパス。

海青社から出版したネイチャー・アンド・ソサエティシリーズ全5巻刊行を踏まえ、今後の課題について議論した。

(12)国際経済・経営地理学研究グループ

代表者 シュルンツェ・ロルフ・平 篤志

国際経済・経営地理学研究グループは、2014年度、下記のような活動を行った。

[第13回研究集会] 2014年3月28日(金) 13時~15時、於 国土館大学世田谷キャンパス。

萩原八郎(四国大):「ブラジルにおける日本企業—その変遷と第3回目の進出ブーム—」

坪本浩之(首都大): Recent restructuring business space of central Tokyo

Rolf D. Schlunze (Ritsumeikan Univ.): Global managers in the global city: Towards a management geography approach

ビジネスミーティング(日本地理学会秋季学術大会(9月、富山大学)について)ほか

[第14回研究集会] 2014年9月21日(日) 15時~17時、於 富山大学五福キャンパス。

阿部康久(九州大):「中国進出日系電機メーカーの取引先の構成と人材現地化」

平 篤志(香川大):「地方地場産業の海外展開と地場の関係に関する考察」

Rolf D. Schlunze (Ritsumeikan Univ.): Information and discussion about future agenda of the research group

ビジネスミーティング(日本地理学会春季学術大会(3月、日本大学)でのシンポジウム開催について)ほか

2015年3月の大会(日本大学)では、海外からの研究者も招いて、シンポジウムの開催を予定している。

当グループ関係者は、当研究集会を含め、当研究グループ代表がその代表を務める国際的研究グループ SIEM(Spaces of International Economy and Management)と連携して、国内外の学会・研究会で積極的に研究発表を行っている。

(13)エスニック地理学研究グループ

代表者 大石 太郎

本研究グループの2014年度の主な活動として、エスニック地理学研究グループのメーリングリストにより、エスニック地理学に関する情報交換を行うとともに、春季学術大会において下記のように研究集会を実施した。また、秋季学術大会において一部のメンバーがシンポジウム「エスニック集団とホスト社会—日本社会の多国籍化に向けて—」を開催した。

[研究集会] 2014年3月28日(金)、於 国土館大学世田谷キャンパス、参加者10名。

金 延景(筑波大・院):「日本における韓国・朝鮮人のエスニシティの再構築—大久保 코리아タウンを事例に—」

杉浦 直(岩手大):「変容するリトルトーキョー—再開発の進展とパブリックアート空間の創出—」

(14)地図・絵図資料の歴史 GIS 研究グループ

代表者 藤田 裕嗣

2014年度の主な活動としては、以下のような研究集会を開催した。

[第11回研究集会] 2014年3月28日(金)、於 国土館大学世田谷キャンパス、参加者約25名。

鎌田高造(国土交通大学):「国土地理院が進める地図の電子化と東日本大震災への取り組み」

[第12回研究集会] 2014年9月21日(日)、於 射水市新湊博物館、参加者約50名。

13:00-14:10 射水市博物館の展示を適宜、見学

14:10-14:15 今回の研究集会の趣旨について挨拶(藤田裕嗣)

14:15-14:55 山元貴継(中部大):「地籍資料と『まちづくり』—沖縄県石垣市における『抱護』林をめぐる—」

15:00-16:00 島崎 毅(射水市新湊博物館・前館長):「石黒信由の測量絵図作成と近代地籍図整備事業」

16:00-16:15 近藤浩二(滑川市立博物館学芸員):「安政5~6年越中常願寺川の洪水被害絵図」

16:15-16:55 質疑応答とワークショップ(館内熟覧と当館学芸員の尾野寺克実による高精細絵図ネット公開に関する説明を含む)

16:55-17:00 ご挨拶(富山県土地家屋調査士会・島田裕己会長)

日本地理学会秋季学術大会の会場である富山大学に近い本館は、石黒信由の測量絵図(高樹文庫)を所蔵し、国の重要文化財に指定されている。その点から、展示の解説も含めて、本館で開催することにした。参加者が多かったのは、富山県土地家屋調査士会にも紹介したためであり、最後に会長からご挨拶をいただいた。

(15)観光地域研究グループ

代表者 フンク カロリン

1)2014年度研究集会の開催

[第4回研究集会] 2014年9月21日(日)、於 富山大学五福キャンパス、参加者約5名。

[ビジネスミーティング] 研究グループの活動についての意見交換を行った。

[第5回研究集会] 2015年3月29日(日)、於 日本大学文理学部、参加者約30名。

2014年度観光地理学系学生論文発表会

観光地理学を学ぶ学生に対する発表の場の提供、ならびに観光地理学者間で教育動向について意見交換を行うため、学生論文発表会を行う(下記)。また、ビジネスミーティングで、研究グループの活動について検討する。

服部陽太(首都大・学)ほか:「箱根・元箱根における観光発展と空間構造」

司 涼(帝京大・学):「日本におけるインタープリテーションを学ぶ場」

名倉一希(埼玉大・学):「スキー観光衰退期におけるスキー場経営体の変化と地域への影響」

新井悠司(筑波大・院):「山形蔵王温泉における温泉観光地の持続性」

飯塚麻衣子(JTB Global Marketing & Travel):「The relationship between local breweries and beer festivals in the UK」

陸 萃(広島大・院):「日本における『労働と観光が融合した活動』の参加者の現状について」

池田拓生(首都大・院):「観光関連コンテンツのメタデータを用いた、地域別のコンテンツ盛り上げりを可視化するWebGISの開発」

平田徳恵(首都大・院):「地域の多主体で取り組む環境や交流までを対象とする地域ブランディング手法」

2) IGU 観光レジャー部会との交流

グループの代表者はIGU 地域大会プレコンgress(2014年8月13日から17日とIGU 地域大会(2014年8月18日から22日、クラブ)に参加し、部会の運営委員として他地域との交流を図った。

(16)農業・農村の地理学研究グループ

代表者 森本 健弘

1) 例会を1回開催した。

[春季学術大会] 2014年3月28日(金)、於 国土舘大学世田谷キャンパス、参加者6名。

①国際地理学連合持続的農村システム研究委員会について。

2013年名古屋会議の成果を報告した。

2014年ルーマニア会議、2015年ポルトガル会議について情報提供した。

②当グループの活動について意見交換した。

2) 国際地理学連合持続的農村システム研究委員会と連携して活動し、その情報を日本の関係者に広く伝えた。本グループメンバーの金 料哲氏(岡山大)は同委員会の共同代表として活動した。

(17)都市地理学研究グループ

代表者 阿部 和俊

[シンポジウム] 2014年3月28日(金)、於 国土舘大学世田谷キャンパス、参加者約90名。

シンポジウム「ジェントリフィケーションと現代都市の形態変化」を都市科研グループ(代表・日野正輝)と共同開催した。

キーナー・ヨハネス(大阪市立大・院):「インナーシティにおける歴史的建造物の再利用とジェントリフィケーション—大阪市中崎界隈を事例に—」

山田浩久(山形大):「東京特別区におけるジェントリフィケーションに関する地代論的考察」

超 章(中国・同済大):「Dilemma of Authenticity: Field Analysis of the Local Residents in a Gentrifying Neighbourhood in Shanghai」

堤 純(筑波大):「シドニーにおけるジェントリフィケーション」

藤塚吉浩(大阪市立大):「ロンドン北東部におけるジェントリフィケーション」

本シンポジウムは中国・社会学者の参加も得て、世界の事例を比較した5報告をもとに、ジェントリフィケーションが現代都市形態に与えた影響・変化について議論し、今後のジェントリフィケーション研究のあり方への展望を得た。

[公開シンポジウム] 2014年9月20日(土)、於 富山大学五福キャンパス、参加者約100名。

公開シンポジウム「平成の大合併の総括と合併自治体の新しい動き」を日本地理学会理事会・都市科研グループ(代表・日野正輝)と共同開催した。

森 雅志(富山市長):「基調講演 富山市の合併とまちづくり」

森川 洋(広島大学名誉教授):「平成の大合併の帰趨と将来の市町村の姿」

須山盛彰(富山地学会):「富山県の市町村合併の歩みと平成の大合併」

福島 茂(名城大):「超広域合併都市の出現とその地域政策・空間管理」

佐藤正志（静岡大）：「被・非合併自治体における公民連携の実情とあり方」

本シンポジウムでは、「公開シンポジウム」として森・富山市長を基調講演者に迎え、都市計画・近代史研究者、さらには市民の参加を得て、今回の大合併について、合併のプラス効果とマイナス効果や今後の自治体のあり方について議論した。

(18)日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ

代表者 沖津 進

1) 2014 年度活動

2014 年度の活動は、2013 年度の活動を各自発展させ、研究グループメンバーの個人活動（野外調査、研究発表、論文執筆など）を中心とした。

2) 研究集会

2014 年春季学術大会では日程調整が困難だったので、研究集会は開催できなかった。その後メールで随時協議を行い、研究の現状、将来への発展について意見交換した。

3) 主な野外調査

2014 年 6 月谷川岳マチガ沢周辺での植生調査（沖津、安田）など、2014 年 9 月戸隠山周辺での植生調査（沖津、百原）など、2014 年 12 月相模原市・笛吹市・市川三郷町（沖津、荻谷、百原）など、計 10 件程度。

4) 主な研究発表

2014 年 9 月、日本第四紀学会。鈴木輝美・荻谷愛彦：「御坂山地西部、四尾連湖周辺に形成された更新世後期の複数の古湖沼」

2014 年 9 月、日本地理学会 2015 年秋季学術大会。荻谷愛彦・松四雄騎：「立山東面・タンボ沢で発見された岩石なだれ堆積物」

など計 15 件程度。

5) 主な論文、報告

百原 新 2014. 房総半島の植物相・植生の発達史—冷温帯性植物の残存について—。分類 14: 1-8.

荻谷愛彦・清水長正・澤部孝一郎・目代邦康・佐藤 剛 2014. 関東山地南部、三頭山北西面にみられる大規模地すべりの地形・地質的特徴と発生年代。地理学評論 87: 386-399.

など計 15 件程度。

(19)持続可能な交通システム研究グループ

代表者 土谷 敏治

1) 2014 年日本地理学会春季学術大会でシンポジウムを開催した。

S08 持続可能な交通システムの構築に向けた地理学からのアプローチ 3 月 28 日（金）13 時～17 時

同シンポジウム報告を E-journal GEO に掲載した（2014 年春季学術大会シンポジウム 持続可能な交通システムの構築に向けた地理学からのアプローチ。E-journal GEO Vol. 9(1): 152-155.）。

2) 研究例会を開催した。

〔第 1 回研究例会〕2014 年 7 月 19 日（土）13 時～16 時、於 駒澤大学文学部地理学科 特研地理学—1、参加者 8 名。

3) 電子メールによる研究例会を実施した。

テーマ：今後の活動と課題 9 月 29 日（月）～10 月 22 日（水）、参加者 9 名。

4) 茨城県ひたちなか市産業交流フェアの公共交通ブースで公共交通利用促進活動を行うとともに、乗合バス・コミュニティバス乗り方教室を共催した。また、来場者に対して、日常の移動行動についてのアンケート調査を実施した。

11 月 2 日（土）、3 日（日）10 時～15 時 30 分、ひたちなか市総合運動公園、調査参加者・調査協力者 7 名。

5) 「第 12 回全国バスマップサミット in 関西」の企画・開催に参加した。

2 月 7 日（土）京都会場・8 日（日）姫路会場。協力：駒澤大学応用地理研究所他、後援：日本地理学会他

6) ひたちなか海浜鉄道の新駅「高田の鉄橋」利用者・周辺居住者の利用状況と新駅に対する評価について、1 月 29 日（木）・30 日（金）に調査を実施した。

(20)自然保護問題研究グループ

代表者 青木 賢人

2014 年度は以下のような活動を行った。

[春季学術大会]

①研究グループミーティング：今年度以降の活動方針を話し合い、次回春季学術大会（日本大学）後に、都心域におけるエネルギー問題と持続可能性をテーマとした研究グループ主催の巡検を行うことを決定した。

[秋季学術大会] 於 富山大学五福キャンパス

①研究グループでのグループ発表：自然保護セクションを立ち上げ、以下の発表を行った。

竹本弘幸（拓殖大）：「論文不正と災害の実像」

辻村千尋（日本自然保護協会）：「リニア中央新幹線の自然保護問題」

②研究グループミーティング：春の大会に向けた方向性の確認を行った。また、大会後に次年度以降も体制を維持し活動を継続することを決定した。

(21)少子高齢化と地域問題研究グループ

代表者 宮澤 仁

富山大学での日本地理学会大会時にビジネスミーティングを行い、科研申請について検討した。その他、研究グループの Web サイトならびにメーリングリストを用いて情報発信・情報交換を行った。第7回集会を3月29日に「新しい公共」の地理学研究グループと共催する予定である。

[集会] 2014年3月28日（金）13時～15時、於 国士舘大学世田谷キャンパス。

都合により中止となった。

[ビジネスミーティング] 2014年9月21日（日）13時～15時、於 富山大学五福キャンパス、参加者 幹事6名。

次期科研申請について。

[第7回集会（予定）] 2015年3月29日（日）13時～15時、於 日本大学、「新しい公共」の地理学研究グループとの共催。

島山輝雄（鳴門教育大）：「廃校跡地を利用したデイサービスによる過疎集落維持の取り組み—徳島県三好市三野地区太刀野山地域を事例に—」

(22)ジェンダーと空間／場所研究グループ

代表者 吉田 容子

1) 特別講演会の開催

[日本地理学会春季学術大会] 2014年3月27日（木）15時～16時30分、於 国士舘大学世田谷キャンパス。

Doreen Massey（オープンユニヴァーシティ名誉教授）：Geography and Politics

場所論・空間論に新しい地平を開き、現実の地域や政治の問題にも深く関わって研究を進めてこられた Massey 教授の特別講演を、本研究グループが中心となって企画した。当日の講演は、2005年に出版された Massey 教授の著書 *For Space* の Part Five: A relational politics of the spatial に関連した内容を中心とするものであった。質疑・応答の時間では、Massey 教授とフロアーとの間で、空間／場所をめぐる活発な議論がなされた。

2) 「GIS と社会研究」グループとの合同研究会 2014年7月6日（日）16時～18時、於 立命館大学朱雀キャンパス。

Nazgol Bagheri（テキサス大学サンアントニオ校地理学教室助教授）：Mapping women in Tehran's public spaces: A geo-visualization perspective（テヘランの公共空間における女性のマッピング：ジオビジュアライゼーションの視点）

都市の公共空間における女性の日常活動を可視化するひとつの試みとして、報告者から提案されたジオビジュアライゼーションの視点について、報告者と「ジェンダーと空間／場所」および「GIS と社会研究」の両研究グループメンバーで議論を行った。

3) 本研究グループが管理するホームページを通じて活動内容を掲載し、情報発信に努めた。

(23)現代南アジア研究グループ

代表者 岡橋 秀典

2014年度は、2回の研究集会を下記の通り春季および秋季の学術大会時に開催した。引き続き、研究交流を進めるとともに、博士課程リーディングプログラムや人間文化研究機構の「現代インド地域研究」における広島大学拠点の活動を紹介し、学際的事業における地理学からの貢献のあり方について議論した。

なお、2014年度で活動を終了する本研究グループの最終成果として、下記の通り、2015年度春季学術大会において7名の報告者によるシンポジウム「インドにおける新経済空間の台頭」を開催する。

[第1回研究集会] 2014年3月28日（金）15時～17時、於 国士舘大学世田谷キャンパス。

岡橋秀典（広島大）：「広島大学における博士課程リーディングプログラムの発足と南アジア地域研究」

友澤和夫（広島大）：「工業化と非正規化—IMT マネサールの工業労働市場—」
 [第2回研究集会] 2014年9月21日（日）13時～15時、於 富山大学五福キャンパス。
 岡橋秀典（広島大）：「人間文化研究機構・現代インド地域研究における広島大学拠点の活動—実績と評価—」
 宇根義己（広島大/NIHU）：「現代インド地域研究の5年間を振り返って—研究員からみた視点—」
 [シンポジウム 2015年度春季学術大会] 2015年3月29日（日）13時～16時 於 日本大学。
 岡橋秀典（広島大）：「インドの経済発展と空間構造の変動—メガ・リージョンの台頭—」
 日野正輝（東北大）・宇根義己（金沢大）：「インドにおける都市化と都市システムの再編」
 友澤和夫（広島大）：「インド自動車産業の発展と産業集積」
 宇根義己（金沢大）：「インド繊維・アパレル産業の空間構造と産業集積」
 鋤塚賢太郎（龍谷大）：「インドにおけるICTサービス産業の地方分散と中小企業の参入機会」
 由井義通（広島大）：「大都市の発展と郊外空間—メガシティ・デリーの郊外開発—」
 森 日出樹（松山東雲女子大）：「郊外農村の社会経済変動—デリー近郊グルガオンの1農村の事例から—」

(24)都市社会地理研究グループ

代表者 神谷 浩夫

本年度は、2014年春季学術大会（於 国士舘大学）、秋季学術大会（於 富山大学）において研究集会を行ったほか、「よくわかる都市地理学（ミネルヴァ書房）」の刊行を記念し、人文地理学会（於 広島大学）において都市地理学研究グループとともにシンポジウムを開催した。集会の詳細は以下の通りである。

[第6回集会] 2014年3月28日（金）15時～17時、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者20名。
 半澤誠司（明治学院大）：「アニメーション産業の地方展開が持つ意味を考える」
 [第7回集会] 2014年9月21日（日）15時～17時、於 富山大学五福キャンパス、参加者10名。
 中西雄二（東海大）：「産炭地域における『同郷性』—与論島出身者の移住過程と同郷団体を事例に—」

(25)GIS と社会研究グループ

代表者 若林 芳樹

GIS と社会研究グループは、2014年度の活動を次のように行った。

[第1回研究集会] 2014年3月17日（月）14時～16時、於 同志社大学今出川キャンパス、参加者5名。2014年3月22日（土）14時～16時、於 首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス、参加者15名。
 Matthew Zook（ケンタッキー大学地理学教室准教授）：Space, Geosocial Media and Society: Augmented Realities and the Power of Digital Representation（空間、ジオソーシャルメディア、社会：拡張現実とデジタル表現の力）
 [第2回研究集会] 2014年3月28日（金）13時～15時、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者10名。
 松島隆一（千葉市役所）：「Government 2.0」に向けた千葉市の取り組み—これからのまちづくりにおける行政、市民の役割—
 東 修作（OKFJ事務局/OSMFJ事務局）：「OpenStreetMap とオープンデータの関わり—データのライセンスと市民活動の視点より—」
 [第3回研究集会]（ジェンダーと空間/場所研究グループとの合同研究会）2014年7月6日（日）16時～18時、於 立命館大学朱雀キャンパス、参加者10名。
 Nazgol Bagheri（テキサス大学サンアントニオ校地理学教室助教授）：Mapping Women in Tehran's Public Spaces: A Geo-visualization Perspective（テヘランの公共空間における女性のマッピング：ジオビジュアライゼーションの視点）
 [第4回研究集会] 2014年9月21日（土）13時～15時、於 富山大学五福キャンパス、参加者7名。
 松田俊司（金沢市市長公室情報政策課）：「『世界の交流拠点都市金沢』の実現に向けたオープンデータの推進」
 福島健一郎（コード・フォー・カナザワ）：「オープンデータとコミュニティを用いた地域課題解決の方法について」

(26)東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ

代表者 豊島 正幸

1)東北地理学会における公開シンポジウムの開催および巡検の実施

①2014年度第1回研究集会「山田での東日本大震災を検証する」

2014年9月13日（土）、於 山田町中央公民館。主催：日本地理学会被災地再建研究グループ、東北地理学会 共催：山田町、トヨタ財団、鹿児島大学地域防災教育研究センター 後援：山田町教育委員会、山田町社会福祉協議会、山田町

商工会、山田町観光協会、三陸やまだ漁業協同組合、船越湾漁業協同組合、東北都市学会、東北大学大学院経済学研究科震災復興研究センター

第一部（山田町中心地での津波災害を検証する）では3件の報告を基に、山田町での津波避難計画について総合討論を行った。第二部（被災者の生活から「まちづくり」を考える）では3件の報告および4件のコメントを基に、商業機能の復興や被災者行動の観点から山田の復興まちづくりについて総合討論を行った。オーガナイザー：岩船昌起（鹿児島大）・岩間信之（茨城キリスト教大）。第一部発表者：岩船昌起、田中耕市（茨城大）。第二部発表者：岩間信之、駒木伸比古（愛知大）・佐々木 緑（広島修道大）、岩船昌起。コメント：岩動志乃夫（東北学院大）、池谷和信（国立民族学博）、佐々木 緑、江川暁夫（桃山学院大）。

②2014年度第2回研究集会「大槌での東日本大震災を検証する」

同年9月14日（日）、於 大槌町中央公民館。主催：日本地理学会 被災地再建研究グループ、東北地理学会 共催：大槌町、トヨタ財団、鹿児島大学地域防災教育研究センター 後援：大槌町教育委員会、大槌町社会福祉協議会、大槌商工会、大槌町観光物産協会、新おおつち漁業協同組合、東北都市学会、東北大学大学院経済学研究科震災復興研究センター

第一部（大槌町での津波対策を考える）では4件の報告を基に、大槌町での津波避難計画について総合討論を行った。第二部（被災者の生活再建と「こころのやすらぎ」と健康を考える）では5件の報告および3件のコメントを基に、被災者の真の生活再建の観点から復興まちづくりについて総合討論を行った。オーガナイザー：岩船昌起、浅川達人（明治学院大）、岩間信之、池谷和信。第一部発表者：岩船昌起、吉川忠寛（防災都市計画研）、田中耕市、岩船昌起。第二部発表者：岩船昌起、浅川達人ほか、池谷和信、大水敏弘（大槌副町長）、岩船昌起ほか。コメント：麦倉 哲（岩手大）、増田 聡（東北大）、森 直子（NIRA 研究調査部）

③2014年度第1・2回研究集会巡検「大槌と山田の被災地を歩く―震災3年半を経て―」

同年9月15日（月）、於 岩手県山田町・大槌町。世話人：岩船昌起。案内者：山中清隆（大槌町総務部総務課危機管理室室長）、池谷和信、吉川忠寛（防災都市計画研）、浅川達人、岩間信之、岩船昌起。内容：前日までの研究報告を踏まえ、山田町・大槌町の現地を訪れ、津波災害の実態および津波防災計画、復興過程における住民の諸活動等について理解を深めた。

2)共同研究等の推進

①岩船昌起（鹿児島大）ほか：復興公営住宅の住まいづくりとそれを取り巻くまちづくりへの提言―被災者の体力や行動と被災地の再建過程に応じた地域性の反映―。トヨタ財団 2012年度 東日本大震災対応 研究助成プログラム「特定課題」政策提言助成（2013年7月まで助成）。

②磯田 弦（東北大）ほか：津波被災地の商業機能再建モニタリング調査。東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究。

③関根良平（東北大）ほか：原発事故による農業の風評被害と営農再建に関する調査研究。東北大学災害科学国際研究所 特定プロジェクト研究。

(27)日本アルプスの大規模地すべり研究グループ

代表者 荻谷 愛彦

1) 研究会の開催 2014年3月29日（土）

2014年春季学術大会（国土舘大学）において第2回研究集会（立ち上げ集会・研究報告会）を開催した。参加者15名。話題提供者：大内俊二「実験山地の発達における隆起速度と大規模崩壊発生の周期」。瀬戸真之・Kim Song-Hyun・田中幸哉「岩塊斜面・岩塊流形成プロセスと大規模地すべりとの関連」。

2) 野外討論会の開催 2014年8月18日（月）

長野県伊那市において藪沢岩石なだれの地形・地質を見学し、成因や年代を議論した。参加者10名。

3) シンポジウムの開催 2015年3月28日（土）

日本地理学会 2015年春季学術大会（日本大学）において、シンポジウム「地理学からみる日本アルプスの大規模地すべり」を開催予定。発表件数（コメント含む）は9件。

4) 主な成果公表

荻谷愛彦・松四雄騎 2014. 細密地形データからみた上高地の崩壊地形. 地図中心 502 (2014年7月号) :10-13.

佐藤 剛・荻谷愛彦 2014. 「北部飛騨山脈の地すべり地形学図 (1:25,000)」の作成とそれを用いた地すべり地形の解説. 地図 52 (1) :1-12.

高岡貞夫 2014. 植生図が語る大地の変化と植生の関係. 地図中心 502 (2014年7月号) :14-17.

5) メーリングリストの活用

メーリングリストを開設し、情報交換、議論、話題提供などに活用している。

(28)水と人の地誌研究グループ

代表者 宮岡 邦任

1) 研究集会の開催（開催日時、開催場所）

[第13回研究集会] 2014年3月28日（金）、15時～17時、於 国士舘大学世田谷キャンパス。

[第14回研究集会] 2014年4月19日（土）、14時～17時、於 お茶の水女子大学。

[第15回研究集会] 2014年5月24日（土）、14時～17時、於 日本大学理工学部。

[第16回研究集会] 2014年6月16日（日）、14時～17時、於 お茶の水女子大学。

[第17回研究集会] 2014年7月13日（日）、14時～18時、於 日本大学文理学部。

[第18回研究集会] 2014年8月8日（金）、14時～17時、於 お茶の水女子大学。

[第19回研究集会] 2014年9月21日（日）、13時～15時、於 富山大学五福キャンパス。

[第20回研究集会] 2014年10月26日（日）、9時～17時、於 多摩川・西武多摩川線沿線。

[第21回研究集会] 2015年1月11日（日）、13時～16時、於 お茶の水女子大学。

2) 学会発表

横山俊一（お茶の水女子大・研）・長谷川直子（お茶の水女子大）・谷口智雅（三重大）・宮岡邦任（三重大）・戸田真夏（青山学院大・非）・大八木英夫（日本大）・元木理寿（常磐大）・山下琢巳（城西大）・早川裕弐（東京大）：『『出版年鑑』による旅行ガイドブックの地域的特徴について』2014年日本地理学会春季学術大会（国士舘大学）など9件

3) 巡検

2014年3月29日（土）、9時～17時、「東京山の手の地誌学的な事象を巡る—温故知新の地理景観—」（東京都庁・旧淀橋浄水場—東京都庁展望室—都営大江戸線都庁前駅（鉄道移動予定）—都営大江戸線国立競技場駅—千駄ヶ谷—神宮外苑—隠田川（渋谷川上流）—表参道—宮下公園—渋谷駅（一時解散して昼食）—松涛—神泉—道玄坂—渋谷川—金王神社—東横線渋谷駅（鉄道移動予定）—東急東横線代官山駅—旧山手通り—目黒川—山手通り—東急東横線中目黒駅）案内者 10名（案内者5名・世話人5名）、参加者 44名（会員21名・非会員23名）

4) その他

MLによる意見および情報交換

(29) 大衆文化の地理学研究グループ

代表者 大城 直樹

2014年度も引き続きさまざまな地理的視座から大衆文化を捉えるべく活動を行った。春・秋2回の学術大会時に都市社会地理研究グループと共同開催で研究集会を行い、8月と10月には現状を認識し過去の記憶を辿るべく、巡検と見学会を行った。詳細は下記の通りである。なお、当研究グループでは、メーリングリストを活用し案内を行い、情報を交換・共有し、web ページ上に活動記録の詳細を掲載している。

[第6回研究集会]（都市社会地理研究グループと共同開催）2014年3月28日（金）15時～17時、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者12名。

半澤誠司（明治学院大）：「アニメーション産業の地方展開が持つ意味を考える」

[第7回研究集会（巡検）] 2014年8月2日（土）13時～17時、於 東京都港区、参加者10名。

「虎ノ門から六本木までの再開発を見て歩く」

[第8回研究集会]（都市社会地理研究グループと共同開催）2014年9月21日（日）15時～17時、於 富山大学五福キャンパス、参加者12名。

中西雄二（東海大）：「産炭地域における「同郷性」—与論島出身者の移住過程と同郷団体を事例に一」

[第9回研究集会（見学会）] 2014年10月25日（土）15時～17時、参加者4名。

「東京ステーションギャラリー企画展『ディスカバー、ディスカバー・ジャパン 「遠く」へ行きたい』をみる」

(30)気候と災害の歴史研究グループ

代表者 三上 岳彦

2014年度は、秋季学術大会で「歴史時代の気候と災害」をテーマに、以下のプログラムの通りシンポジウムを開催した。2014年9月21日（日）13時～17時、於 富山大学五福キャンパス、参加者50名。

田上善夫（富山大）：「14・15世紀の東アジアの気候変動の復元」

平野淳平 (防災科学研) : 「東京周辺における複数の古日記天候記録を用いた 18 世紀以降の夏季気温変動の復元」
山田浩世 (学振興会特別研究員・PD) : 「文献史料より見た琉球・奄美の災害状況—1830 年代を中心に—」
Rudolf Brazdil (Masaryk Univ.): Climate, droughts and floods in Central Europe during past 500 years
庄 建治朗 (名古屋工業大) : 「古記録による歴史時代の琵琶湖洪水の復元」
佐野雅規 (総合地球環境学研) : 「樹木年輪の酸素同位体比による過去 400 年間の東アジア夏季モンスーン変動の復元」
芳村 圭 (東京大学大気海洋研) : 「アンサンブルカルマンフィルタを用いた水同位体比データ同化システムの構築」
取出欣也 (東京大)・芳村 圭 (東京大学大気海洋研) : 「データ同化を用いた歴史天候復元に向けて—理想実験による実現可能性の検討—」

(31)健康地理研究グループ

代表者 埴淵 知哉

2014 年度は、以下のとおり活動を行った。

[研究集会] 2014 年 3 月 28 日 (金)、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者 9 名。

本研究グループの立ち上げに際して、活動目的および研究集会開催等の企画について参加者間で意見を出し合い、今後の活動方針を決定した。具体的には、研究グループの紹介やメンバー間の連絡に利用できるウェブサイトとメーリングリストを整備すること、翌年の春季学術大会では多人数による研究紹介のためのプレゼンを研究集会の企画とすることなどが決められた。

[ウェブサイト]

本研究グループの目的や活動予定を紹介するためのウェブサイトを作成した。(<https://www.facebook.com/healthgeo>)

[メーリングリスト]

本研究グループからの連絡やメンバー間の情報交換に利用するため、メーリングリストを開設した。

(32)「新しい公共」の地理学研究グループ

代表者 佐藤 正志

2014 年度は下記の通りに活動を行った。

[第 1 回集会] 2014 年 3 月 28 日 (金)、於 国士舘大学世田谷キャンパス、参加者 11 名。

①研究会発足にかかる運営体制の決定

研究会の運営体制、メーリングリスト、ホームページの作成等について決定した。

②2014 年度の研究会の開催にかかる決定

秋季大会および夏季・冬季研究会の実施について決定した。

[第 2 回集会] 2014 年 9 月 21 日 (日)、於 富山大学五福キャンパス、参加者 9 名。

①研究報告

佐藤正志 (静岡大) : 「合併後の公民連携における事業運営の継続性—静岡県磐田市の指定管理者制度運営を事例に—」

②ビジネスミーティング

2015 年度以降の研究グループ活動の方針について、シンポジウムの開催や研究費獲得等について審議した。

[第 3 回集会] 2015 年 1 月 24・25 日 (土・日)、於 東北公益文科大学鶴岡キャンパス、参加者 11 名。

①研究報告

紅葉咲姫 (東京大・学) : 「地方自治体の大学誘致とその影響」

松岡稔明 (金沢大・学) : 「原子力発電所の立地と地域経済、地域社会の再編—福井県高浜町を事例に—」

新堀文章 (金沢大・院) : 「地方国立大学生の『地方らしさ』が生じる理由」

②ビジネスミーティング

2015・2016 年度の研究グループについて、出版の企画について議論した。

2015 年春季学術大会で、メンバー間での分担等について決定することを確認した。

9. 他学会との交流等

- (1)2014 年日本地球惑星科学連合大会
2014 年 4 月 28 日 (月) ～2 日 (金) にパシフィコ横浜会議ホールにおいて開催された。
- (2)富士学会 2014 年度春季学術大会 (後援)
2014 年 5 月 24 日 (土) ～25 日 (日) に富士市勤労者福祉センターにおいて開催された。
- (3)日本学術会議公開シンポジウム「高校地理歴史教育に関するシンポジウム」(共催)
2014 年 6 月 14 日(土)に東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE レクチャーホールで開催された。
- (4)第 1 回「震災対策技術展」大阪(後援)
2014 年 6 月 17 日 (火) ～18 日 (水) にコングレコンベンションセンターで開催された。
- (5)第 9 回日中韓地理学会議 (共催)
2014 年 7 月 30 日 (火) ～8 月 4 日 (日) に韓国・プサン市において開催された。
- (6)全国中学校地理教育研究会第 55 回全国研究大会 (後援)
2014 年 8 月 1 日 (金) ～2 日 (土) に日本地図センターにおいて開催された。
- (7)第 53 回地図ならびに地理作品展 (後援)
2014 年 9 月 6 日 (土) ～20 日 (土) に広島市こども文化科学館において開催された。
- (8)GIS day in 東京 2014 (後援)
2014 年 10 月 25 日 (土) に首都大学東京・南大沢キャンパスにおいて開催された。
- (9)GIS day in 関西 2014 (後援)
2014 年 10 月 25 日 (土) に立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された。
- (10)旭川市「第 24 回私たちの身のまわりの環境地図作品展」(後援)
2014 年 10 月 25 日 (土) ・26 日 (日) に旭川市科学館において開催された。
- (11)岐阜県「第 20 回児童生徒地図作品展」(後援)
2014 年 11 月 1 日 (土) ～11 月 27 日 (木) に岐阜県図書館において開催された。
- (12)2014 年度「初等中等教育における GIS を活用した授業に係る優良事例表彰」(後援)
2014 年 11 月 7 日 (金) ～8 日 (土) に中部大学春日井キャンパスにおいて初等中等教育現場において、GIS を実践的に活用した授業に取り組んでいる教員に対し、表彰が行われた。
- (13)鳥取県「第 16 回児童生徒地域地図発表作品展」(後援)
2014 年 11 月 15 日 (土) ～12 月 20 日 (土) に鳥取市歴史博物館 (やまびこ館)、倉吉未来中心、とりぎん文化会館において巡回展示が開催された。
- (14)第 22 回地図地理検定 (後援)
2014 年 11 月 23 日 (日) に開催された。
- (15)GIS day in 中国 2014 (後援)
2014 年 11 月 28 日 (金) に広島大学東広島キャンパスにおいて開催された。
- (16)第 23 回風工学シンポジウム(協賛)
2014 年 12 月 3 日 (水) ～5 日 (金) 東京大学山上会館において開催された。
- (17)多摩市「第 18 回身のまわりの環境地図作品展」(後援)
2014 年 12 月 12 日 (金) ～12 月 14 日 (日) にパルテノン多摩において開催された。
- (18)地理教育全国合同シンポジウム(協賛)
2014 年 12 月 27 日 (土) に早稲田大学 14 号館 101 教室において開催された。
- (19)第 18 回全国児童生徒地図優秀作品展 (後援)
2015 年 1 月 10 日 (土) ～2 月 22 日 (日) に地図と測量の科学館、国土交通省 1 階展示コーナー、NHK ふれあいホールギャラリーにおいて開催された。
- (20)淡国際活断層シンポジウム 2015 (後援)
2015 年 1 月 12 日 (月) ～17 日 (金) に兵庫県立淡路夢舞台国際会議場で開催された。
- (21)第 47 回地図展「横浜のまち みち みなと」(後援)
2014 年 1 月 15 日 (木) ～1 月 22 日 (木) に横浜港大さん橋国際客船ターミナル 2 階 CIQ プラザ (くじらのおなか) に
おいて開催された。
- (22)第 19 回「震災対策技術展」横浜 (後援)
2015 年 2 月 5 日 (木) ～6 日 (金) に横浜国際平和会議場において開催された。
- (23)全国バスマップサミット in 関西 (後援)
2014 年 2 月 7 日 (土) ・8 日 (日) に京都・姫路で開催された。

2015年度研究グループ一覧

2015. 2. 28 常任理事会承認

	グループ名	代表者
継 続	<ul style="list-style-type: none"> ・近代日本の地域形成研究グループ ・乾燥・半乾燥地域研究グループ ・都市気候環境研究グループ ・土地利用・陸域変化研究グループ ・離島地域研究グループ ・環境地理教育研究グループ ・情報地理研究グループ ・流通・消費の地理学研究グループ ・中国地理研究グループ ・産業経済の地理学研究グループ ・ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ ・国際経済・経営地理学研究グループ ・エスニック地理学研究グループ ・地図・絵図資料の歴史GIS研究グループ ・観光地域研究グループ ・農業・農村の地理学研究グループ ・都市地理学研究グループ ・日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ ・持続可能な交通システム研究グループ ・自然保護問題研究グループ ・少子高齢化と地域問題研究グループ ・ジェンダーと空間/場所研究グループ ・GISと社会研究グループ ・東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ ・日本アルプスの大規模地すべり研究グループ ・水と人の地誌研究グループ ・気候と災害の歴史研究グループ ・健康地理研究グループ ・「新しい公共」の地理学研究グループ 	<p>天野 宏司</p> <p>鹿島 薫</p> <p>榊原 保志</p> <p>木本 浩一</p> <p>須山 聡</p> <p>朴 恵淑</p> <p>原 真志</p> <p>和田 崇</p> <p>土屋 純</p> <p>小野寺 淳</p> <p>末吉 健治</p> <p>渡辺 和之</p> <p>シュルンツェ・ロルフ</p> <p>平 篤志</p> <p>大石 太郎</p> <p>藤田 裕嗣</p> <p>カロリン・フンク</p> <p>森本 健弘</p> <p>阿部 和俊</p> <p>沖津 進</p> <p>土谷 敏治</p> <p>青木 賢人</p> <p>宮澤 仁</p> <p>影山 穂波</p> <p>若林 芳樹</p> <p>豊島 正幸</p> <p>荻谷 愛彦</p> <p>宮岡 邦任</p> <p>三上 岳彦</p> <p>埴淵 知哉</p> <p>佐藤 正志</p>
新 設	<ul style="list-style-type: none"> ・都市の社会・文化地理学研究グループ 	<p>大城 直樹</p>